

山姥（やまんば）

ワキ・ワキ連／善き光ぞと影頼む。善き光ぞと影頼む。仏の御寺尋ねん。

ワキ／これは都方に住まひ仕る者にて候。これにわたり候御方は。都に隠れもましまさぬ百魔山姥と申す遊君にて御座候。山姥の山廻りするといふ事を。曲舞くせまいに作り御謡

い候により。京童きょうわらんの異名に百魔山姥と附け申して候。御親の十二年に当らせ給ひて候程に。善光寺へ御参りありたき由仰せ候間。我々御共申し。只今信濃の国善光寺へと急ぎ候。

ワキ・ワキ連／都を出でてさざ波や。志賀の浦船こがれ行く。末は荒乳あらいちの山越えて。袖に露散る玉江の橋。かけて末ある越路の旅。思ひ遣ること遥なれ。梢波立つ汐越の。

梢波立つ汐越の。安宅の松の夕煙。消えぬ浮身の罪を斬る弥陀の剣の砺波山。雲路うながす三越路みこしじの。国の末なる里問へば。いとど都は遠ざかる。境川さかいがわにも著きにけり。境川にも著きにけり。

ワキ／御急ぎ候ほどに。これははや越後と越中の境川に御著きにて候。これより道二つ有る由申し候程に。宿の亭主に尋ね申そうずるにて候。（ワキと狂言の問答）

善光寺への路次るしの様体、尋ね申して候へば。道二つ有る由申し候。一つは上路越あづるこえと申し候は。己身こしんの弥陀、唯心ゆいしんの浄土たに譬たとへられたる道にて候が。但し御乗物の叶はぬ由申し候。

シテ連／げにや常に承る。西方の浄土は十万億土とかや。ここはまた弥陀来迎ちやくぐの直路なれば。上路の山とやらんに参り候べし。とても修行の旅なれば。乗物をこれに留め置き。徒跣かちはだしにて参り候べし。道しるべしてたび候へ。（ワキと狂言の問答）

ワキ／あら不思議や。未だ暮れまじき日にて候が俄にわかに暮れて候はいかに。

シテ／なうなうお宿、参らせうなう。これは上路の山とて人里遠き處なり、お宿参らせ候はん。

ワキ／これは初めて善光寺へ参る者にて候が。行き暮れ前後を忘れて候所に。嬉しくも承り候ものかな。さらばこれへ参り候。

シテ／今宵のお宿参らすこと。取分き思ふ子細あり。承り及びたる山姥の歌の一節ひとひら謡ひて聞かせ給へ。鄙ひなの思ひ出と思ふべし。その為にこそ日を暝くらし。お宿をも参らせてこそさむらへ。いかさまにも謡はせ給へ。

ワキ／これは思ひも寄らぬ事を仰せ候ものかな。誰と御覽ぜられて山姥の歌の一節とは御所望候ぞ。

シテ／いや何をか包ませ給ふらん。あれにましますは百魔山姥にてはさむらはずや。まづこの歌の次第とやらんに。よし足曳きの山姥が。山廻りすると作られたり。あら面白や候。此の御名は曲舞によりての異名にてわたらせ給ふ。さて真の山姥をば何と知し召されて候ぞ。

ワキ／真の山姥は山に住む鬼女とこそ曲舞には見えて候へ。

シテ／山に住む鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人なりとも。山に住む女ならば妾わらわが身の上にてはさむらはずや。年頃色には出させ給ふ言の葉草ことのはぐさの露ほども。御心には懸け給はぬ。恨うらみ申しに参りたり。道を極め名を立てて。世情万徳せじやうばんとくの妙花みょうかを開くこと。

此の一曲の故ならずや。然らば妾が名をも用い舞歌音楽の妙文の。声仏事もなし給はば。などが妾も輪廻を離れて。帰性きしやうの善處ぜんじよに到らざらんと。恨を夕山の。禽獸とりけだものも鳴き添へて。声を上路の山姥が靈鬼れいこれまで来りたり。

シテ連／不思議の事を聞くものかな。さては真の山姥の。これまで来り給へるか。

シテ／我国々の山廻りに今日しもここに廻り遇ふ事。我が名の徳を聞かん為なり。謡ひ給ひてさりとては。我が妄執を晴し給へ。

シテ連／此上はとかく辞しなば恐ろしや。若し身の為や悪しかりなんと憚りながら時の調子を。取るや拍子を進むれば。

シテ／しばさせ給へ、とてもさらば。暮るるを待ちて月の夜声に。謡ひ給はば我も亦。真の姿を現すべし。すはや陰るふ夕月の。さなきだに暮るるを急ぐ深山辺の。

同音／暮るるを急ぐ深山辺の。雲に心をかけ添へて。此の山姥が一節を夜すがら謡ひ給はば。其時我が姿をも。現し衣の袖つぎて。移り舞を舞ふべしと。二ふかで見れば其儘。かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。「中入」

シテ連／餘りの事不思議さに。更に真と思ほえぬ。鬼女が言葉を違えじと。

ワキ・ワキ連／松風共に吹く笛の。松風共に吹く笛の。声澄み渡る谷川に。手まづ遮る曲水の。月に声澄む深山かな。月に声澄む深山かな。

シテ／あら物凄の深谷やな。あら物凄の深谷やな。寒林に骨を打つ。霊鬼泣く泣く前生の業を怨み。深野に花を供ずる天人返す返す。幾生の善の悦ぶ。いやまこと善悪不

二。何をか怨み何をか悦ばん。萬箇目前の境界。懸河渺々として巖岬々たり。山復山。何れの工か青巖の形を削りなせる。水復水。誰が家にか碧潭の色を。染め出せる。

シテ連／恐ろしやさも物凄き宵の間の。月も木深き山陰より。その様怪したる顔ばせは。いかさま先に聞えつる。其の山姥にてましますか。

シテ／とてもはや穂に出で初めし言の葉の。気色にも知るし召さるべし、我にな恐れ給ひそとよ。

シテ連／此上は恐ろしながら烏羽玉うばたまの。闇まぎれより現れ出づる。姿詞すがたことばは人なれども。

シテ／髪には荊棘あせどるの雪を戴ぎ。

シテ連／眼まなこの光は星の如く。

シテ／さて面の色は。

シテ連／さ丹塗にぬりの。

シテ／軒の瓦の鬼の形。

シテ連／今宵始めて見る事を。

シテ／何に譬へん。

シテ・シテ連／古いにしえの。

同音／鬼一口の雨の夜に。鬼一口の雨の夜に。神鳴り騒ぎ恐ろしき。其の夜を思い白玉か何ぞ問ひし人までも。我が身の上になりぬべき。浮世語も恥づかしや。浮世語も恥づかしや。

シテ／春の夜の一時を。千金にも換へじとは。花せごけりに清香、月に陰。これは思のたまさかに。行き遇あふ人の歌の一節。其の一刻いちじくもあたら夜に。早々謡ひ給ふべし。

シテ連／げに此上はともかくも。云ふに及ばぬ山中やまなかに。

シテ／一声いっせいの山鳥さんちやう、羽たを敲く。

シテ連／鼓たは瀧波たきなみ。

シテ／袖しそは白栲しろたえ。

シテ連／雪を廻らす木の花の。

シテ／なにはの事か。

シテ連／法のり。

シテ・シテ連／ならぬ。

△次第▽

同音／よし足曳きの山姥が。よし足曳きの山姥が。山廻りするぞ苦しき。

△序▽

シテ／それ山といっぱ塵土ちりひじより起こつて。

同音／天雲懸る千丈の峰かか。

シテ／海は苔の露より滴りてしたた。

同音／波濤を畳むはとう たた。萬水ばんすいたり。

△サシ▽

シテ／一洞空しき谷の聲。梢に響く山びこの。

同音／無声音むししおんの聞きたよりとなり。声に響かぬ谷もがなと望みしもげにかくやらん。

シテ／殊に我が住む山河の景色。山高うして海近く。谷深うして水遠し。

同音／前には海水瀼々じしゅうとして月真如の光を掲げ。後には嶺松れいしょう巍々ゑいゑいとして。風常樂かぜじょうらくの

夢を破る。

△曲▽

遠近のたつぎも知らぬ山中に。おぼつかなくも呼子鳥よこどりの。声凄き折々は。伐木丁々はきど

して。山更に幽かすかなり。法性峯ほうしやうみやま聳えては。上求菩提じやうきゅうぼだいを現し。無明谷むみやう深きよそほひは。下化げけ

衆生を表して金輪際に及べり。抑々山姥は生所しやうじよも知らず宿も無く。唯雲水ゑんすいを便りにて

至らぬ山の奥もなし。

シテ／然れば人間に非ずとて。

同音／隔つる雲の身を変へ。假に自性じしやうを変化して。一念化生の鬼女となって目前に來れども。邪正一如と見る時は。色即是空そのままに。仏法有れば世法あり。煩惱有れば菩提あり。仏有れば衆生有り。衆生有れば山姥も有り。柳は緑花は紅の色々。さて人間に遊ぶ事。或時は山賤やまがっの。樵路しやうろに通ふ花の陰。休む重荷に肩を貸し月諸共に山を出で。里まで送る折もあり。又或時は織姫の。五百機いちはた立つる窗まどに入って。枝の鶯糸繰り。紡績ほの宿せに身を置き人を助くる業をのみ。賤の目に見えぬ鬼とや人の云うらん。シテ／世を空蟬の唐衣。

同音／払はぬ袖に置く霜は。夜寒の月に埋もれ。打ちすさむ人の絶間にも。千声せんせいばんせい万声の。砧せに声のしで打つはただ山姥が業なれや。都に帰りて世語にせさせ給へと。思ふは猶も妄執か。ただ打捨てよ何事も。よし足曳きの山姥が。山廻りするぞ苦しき。

シテ／足曳きの。
同音／山廻り。

ハカケリ▽

シテ／一樹の蔭一河の流。皆これ他生の縁ぞかし。ましてや我が名を夕月の。浮世を渡る一節も。狂言綺語きごの道直みちすに。讚さん仏乗ぶつじやうの因いんぞかし。あら御名残惜しや。暇いと申まうして帰る山の。

同音／春は梢に咲くかと待ちし。

シテ／花を尋ねて山廻り。

同音／秋はさやけき影を尋ねて。

シテ／月見る方にと山廻り。

同音／冬は冴え行く時雨の雲の。

シテ／雪を誘ひて山廻り。

同音／廻り廻りて輪廻を離れぬ妄執の雲の。

シテ／塵積もつて山姥となれる。

同音／鬼女が有様見るや見るやと峯に翔り。谷に響きて今までここに。在るよと見えしが山復山に山廻り。山復山に山廻りして。行くへも知らずなりにけり。